

## 保育におけるオノマトペ表現の役割と有効性 —遊び場面における幼児へのことばがけの分析—

Sound symbolism facilitates children's understanding of a situation  
— An analysis of onomatopoeia in a free play setting —

杉村 智子\*・西村 真実\*\*・石田 慎二\*\*\*・岡澤 哲子\*\*\*\*

Tomoko Sugimura

Mami Nishimura

Shinji Ishida

Tetsuko Okazawa

100名の保育士志望学生が、語彙獲得期にあたる1歳から3歳までの子どもとの遊び場面において表出したオノマトペとその文脈を分析した結果、次のようなオノマトペの表出傾向と機能が明らかになった。まず、具体的状況や動作が表現されているオノマトペは多く表出されるが、心情を表すオノマトペは表出されていなかった。また、女兒よりも男児と関わる時のほうが多くのオノマトペが表出されていた。さらに、子どもの動作や行動に共鳴させる形でオノマトペが頻繁に表出されており、そのことが動作と音韻表象との結びつきへの気づきを促し、後に、動作と動詞語の恣意的な結びつきの理解へとつながることが示唆された。

### 目的

日本語におけるオノマトペ（擬音語・擬態語）は、感覚や感性、さらには身体のことばとして近年注目を集め、我々の生活に密着した様々な分野で、その有効性や活用法に関する検討がなされている。例えば、マーケティングの方略として、様々な商品名や店名にオノマトペを使用したり（田守、2012）、食べ物の味、食感、見た目などを表現するためにも、オノマトペが多用されている（加藤・深澤・森、2015）。また、運動・スポーツ領域で活用されている偽言語・擬態語は、スポーツオノマトペと呼ばれ、スポーツ指導における効果的な教示法として検討されている（吉川、2013）。

教育現場においても、オノマトペは、主に学習教材との関連性において、その機能や役割、または教授法等が検討されてきた。例えば、子ども用の歌のテキストにみられるオノマトペの機能分析（葛西、2012、2014）、オノマトペ絵本の活用（小池、2015；古市、2014）、国語科の教科書教材におけるオノマトペと読解指導との関連性の検討（中里、2005）等がなされている。また、日本語学習者にとっては理解が難しいオノマトペの学習を促進するための学習教材の開発（前田・上間・白水・松下、2015；三上、2006）も試みられている。このように、教育現場においては、テキストや教科書等に文字として表現されたオノマトペを研究対象とすることが多いといえる。

これに対して乳幼児期の子どもを対象としたオノマトペ研究は、実際の保育場面や日常場面の中で、子どもや養育者、保育者が自然に表出したオノマトペを対象とすることが多く、これらの

\* こども学科教授    \*\* こども学科准教授    \*\*\* こども学科准教授    \*\*\*\* こども学科教授

研究は次の2つに大別することができる。1つは子どもが表出するオノマトペや、子どものオノマトペの理解に焦点をあてたもので (e.g. 福田、1999；針生、2010；近藤・渡邊、2010；丹野、2005)、主に子どもの言語発達や表現力の指標としてオノマトペを分析しているものである。もう1つは、保育者や養育者が子どもと関わるさいに、子どもに対して発するオノマトペに焦点をあてたものである。近藤・渡邊 (2008) も指摘しているように、後者、つまり、成人が保育場面等で表出するオノマトペの機能や役割に関しては研究例が少ないという現状にある。

したがって本研究では、保育士志望学生が、自然な遊び場面において幼児と関わるさいに表出するオノマトペの表出傾向やその機能と役割についての探索的検討を行う。以下に、従来の研究の概要と課題をふまえたうえで、本研究の目的と概略について述べる。

保育者や養育者が表出するオノマトペに関する研究には、1つめとして、保育活動に対する子どもの理解を援助する言語ツールとしてのオノマトペの特徴や役割に焦点をあてたものがある (近藤ら、2008；近藤・渡邊、2008；原子・奥野、2007)。例えば、原子・奥野 (2007) は、担任保育者を対象として、リズム運動や歌唱指導等の場面において、保育者がオノマトペの表現を用いる事例を収集している。事例においては、保育者が、動きの状態を表現するオノマトペを使用することによって、子どもの動きがスムーズになること等が観察された。しかし、近藤・渡邊 (2008) も指摘しているように、この研究は表出されたオノマトペの数や種類、また、表出された状況の分析も行われておらず、事例報告にとどまっている。

これをうけて近藤・渡邊 (2008) は、2名の保育者について、80分間の自由保育活動の12回分の録画記録を分析し、どのようなオノマトペがどの程度表出されているかを量的に明らかにした。この研究では、それぞれの保育者が表出した203個、144個のオノマトペが、①視覚 (「ピカッ」と光る)、②聴覚 (「カァカァ」鳴く)、③触覚 (「ベタベタ」する)、④動作 (「グルグル」回る)、⑤気分・心情 (「ドキドキ」する)、の、オノマトペの用法を基準にして分類された。その結果、どちらの保育者も“動作”の表出が最も多く (43.8%、37.5%)、次いで“視覚” (23.6%、22.9%) と“聴覚” (20.2%、29.9%) であり、“気分・心情” (3.0%、0.5%) ほとんど表出されることがなかった。また、動作に関するオノマトペは、保育者が子どもに伝えたい動きに臨場感を与える時や、保育者が子どもの行動を促す時に表出されていた。

2つめとしては、養育者によるオノマトペの表出傾向が子どもの語彙獲得に与える影響に焦点をあてた研究があげられる (小椋・吉本・坪田、1997；宮崎・岡田・針生・今井、2010)。まず、小椋ら (1997) は、1歳から2歳前後までの語彙獲得期にあたる子どもをもつ2組の親子の、自然場面での会話で表出されたオノマトペの分析を行った。その結果、子どもが表出したオノマトペは、母親が表出したオノマトペに限定される傾向にあり、オノマトペの表出頻度が少ない母親の子どもは、同様に少ない種類のオノマトペしか表出しなかった。また、宮崎ら (2010) の研究では、1歳半から2歳までの子どもの養育者は、絵カードに描かれた動作を説明するさいに、成人に対して説明する時よりも、自分の子どもに対して説明する時のほうが、オノマトペを多用する傾向にあった。

以上のような従来の研究からは、保育者や養育者が表出するオノマトペの傾向は示されているが、以下のような課題があると考えられる。まず1つめは、これらの研究のほとんどが、1名もしくは2名を対象とした事例研究であり、保育者や養育者が日常的に表出するオノマトペの種類や頻度についての全体的傾向が明らかにされていないことである。宮崎ら (2010) の研究のみが、23名の養育者を対象としていたが、動作についての絵カードを説明するという限定的な場面での検討であり、具体的にどのようなオノマトペが表出されたかについても分析が行われて

いない。小椋ら（1997）の研究においても示されているように、オノマトペの表出数やその種類には個人差が大きいと、大規模集団に対する表出傾向を捉える必要があると考えられる。

したがって本研究では、保育者や養育者の立場と比較的共通点が多いと考えられる、保育士や幼稚園教諭等を将来の進路として志望している 100 名の学生を対象とし、子どもとの遊びを介したやりとりにおけるオノマトペの表出傾向を分析することを目的とする。1 歳から 3 歳までの語彙獲得期にあたる年齢の子どもと 1 対 1 で遊ぶ 5 分間の場面において、学生がどのくらいの頻度で、どのようなオノマトペを表出するかを探索的に分析し、一般的な保育者や養育者のオノマトペの表出傾向を検討する。

次に、従来の研究における 2 つめの課題は、表出されたオノマトペの分類方法についてである。従来の研究では、辞書における分類と類似した方法、すなわち、オノマトペの用法を基準として分類する方法が用いられてきた。例えば、小野（2007）の日本語オノマトペ辞典においては、①音（擬音語として用いられるもの）、②声（擬音語のうち人間や動物などの生命体がだすもの）、③さま（擬態語として用いられ品詞に関係なく様態を表すもの）、④音・さま（擬音語・擬態語両方の用法があるもの）、⑤名（特に名詞として用いられるもの）の 5 つに分類されている。これと類似した形で、丹野（2005）では、①音を表現（ワンワン、等、音声や泣き声、音をまねして表現したもの）、②動きを表現（パクパク、等、動作や動きを表現したもの）、③状態・感覚を表現（ベタベタ、等、事物の様子を表現したもの）、④内的状態・感覚を表現（ドキドキ、等、主観による状態や感覚の認識を表現したもの）の 4 つに分類されている。

しかし、この用法を基準とした分類には、次のような問題点がある。まず、1 つめは、この分類ではオノマトペ語それ自体を分類するため、同一のオノマトペ語が複数の用法をもつ場合に分類を特定することができない点である。例えば、“ワンワン”という語の場合、一般的には音を表す擬音語としての用法が多いが、子どもやその周囲の大人が使用する場合は、犬そのものを指す名詞として用いられる場合も多い。

2 つめは、実際にそのオノマトペ語が使用されている文脈において、その語がどのような意図をもって表出されたのか、また、どのように機能しているかという点が明らかにはならない点である。例えば、“トントン”という語はノック音等の音を表す擬音語であるが、保育者が子どもに、“ここをトントンしてみて”というように、子どもの行動を促すことを意図して表出されることも多い。保育者が自由保育時に表出したオノマトペの分類を行った近藤・渡邊（2008）においても、“動作を表す”として同じカテゴリーに分類されたオノマトペであっても、多用な文脈で、保育者が様々な意図をもって表出していることが事例として観察されている。

したがって本研究では、小野（2007）による用法の分類に加えて、文脈による分類を行い、学生が子どもと遊びを介したやりとりを行う中で、オノマトペをどのように機能させているかを分析する。近藤・渡邊（2008）は、保育者が動作を表すオノマトペを次の 2 つの文脈で用いている事例を示している。1 つめは“保育者自身が動く、または幼児と共に動くさいに用いた場面”であり、2 つめは“保育者が幼児の動きを誘発するさいに用いた場面”である。本研究では、この分類を参考とし、学生が表出するオノマトペをその表出文脈によって、主に、“子どもの動作・行動に合わせた表出”、“学生自身の動作・行動に合わせた表出”、“子どもの動作・行動・注意の喚起”、に分類することとした。

## 方法

### (1) 調査対象者

保育士・教員養成系の大学の学部に所属する1年生100名（男性26名、女性74名）であり、将来の進路として保育士・幼稚園教諭・小学校教諭を志望する学生であった。

乳幼児100名（男児50名、女児50名、平均年齢2歳3ヶ月、最小1歳0ヶ月、最大3歳6ヶ月）であり、同大学学部が運営する子育て支援センターの事業に、保護者と共に参加した子どもであった。

### (2) 調査時期・場所

調査時期：2015年10月～2016年2月

調査場所：奈良県に位置する大学内の子育て支援センターの施設であり、同施設は、実際の保育園・幼稚園の施設を模した保育演習室と野外施設を備えていた。学生と子どもが主に関わる室内の保育演習室は、約縦9.6m×横23.6m、約227m<sup>2</sup>のスペースであり、その中に様々な遊具や玩具が備えられていた。

### (3) 調査手続き

#### 1. 学生と子どもとの遊び場面の録画

子どもとその保護者に遊ぶ空間や遊び道具などを提供する“つどいの広場”と呼ばれる子育て支援事業において、授業の一環として参加実習を行う学生と子どもとの遊び場면을調査の対象とした。つどいの広場は毎週1回約2時間行われており、毎回、約30組の親子が参加していた。その中において、1回あたり約8人前後の学生が参加実習を行い、全部で12回の参加実習が行われた。

参加実習においてそれぞれの学生は、事前指導や事前学習で立てた計画にそって子どもと関わる実習を進めていくが、その中でも、ある子どもと1対1で遊びややりとりが行われている5分間の様子を録画した。録画は、保育演習室の天井に設置された2つのカメラによって2方向から行われた。これらのカメラは、隣接する観察室から撮影位置や距離を操作することが可能であり、学生や子どもの動きを追いながら撮影を行った。また、音声については、学生のエプロンにつけたピンマイクによって録音した。

#### 2. 録画記録の作成

参加実習の後、それぞれの学生は、自分と子どもが1対1で遊びや、やりとりを行っている5分間のDVDの録画記録を作成した。録画記録は、会話等の音声情報をすべて書き起こすだけでなく、その時の状況、動作、表情についても、詳細に書き起こすことを求められた。以下、この100名分の録画記録を分析の対象とした。

## 結果

### (1) オノマトペの事例数と種類数

小野（2007）の、日本語オノマトペ辞典に収録されている語をオノマトペとみなし、100名の録画記録におけるオノマトペの事例数をカウントした。5分間の遊び場面において、同じ文脈で複数回表出された同一のオノマトペについては、1事例とカウントした。ただし、同一のオノマトペであっても文脈や使用方法が異なる場合は、それぞれをカウントの対象とした。例えば、子どもに、ハンマーの玩具で遊ぶように促すために「トントンする？」と表出した場合と、ハン

マーをたたく子どもの動作に合わせて「トントン」と表出した場合とでは、別カウントとした。

なお、絵本の中に文字として記述されていたオノマトペを読む場面において表出された11例は、自発的に発せられたものではないと判断し、事例の対象からは除外した。また、オノマトペであると考えられるが、小野（2007）に収録されていなかった4例（「シュワッチ」「ダバダバ」「ドウンドウン」「ピポパ」）も、事例からは除外した。

表1は、表出されたオノマトペの種類とその事例数を示したものであり、オノマトペの種類数は88、事例数の総計は181であった。この表における“オノマトペ”とは、小野（2007）における収録語であり、“変形”とは実際に表出されたオノマトペのうち収録語とは語尾等が少し異なるが、収録語としてみなしたオノマトペのことである。

## (2) オノマトペの表出数

一人の学生が5分間の遊びにおいて、どれくらいの数のオノマトペを表出しているか、すなわち、オノマトペの表出数をカウントした。表2は、オノマトペの表出数ごとの学生の人数と%

表1 表出されたオノマトペの種類と事例数

番号	オノマトペ	事例数	変形	用法	番号	オノマトペ	事例数	変形	用法
1	ブーブー	11	ブーブ	音	44	ガツチャン	1		音
2	コロコロ	9		音・さま	45	ガブツ	1		さま
3	シュー	7	シューン	音・さま	46	ガラガラ	1		音
4	トントン	7		音・さま	47	ギュー	1		さま
5	ジャー	6		音・さま	48	ゲーゲー	1		音
6	ブッブー	6		音	49	グサツ	1		さま
7	キラキラ	5		さま	50	グチャグチャ	1		さま
8	ブーブー	5	ブップ, ブッブー	音	51	グリグリ	1		さま
9	ブン	5	ブーン	音・さま	52	クルクル	1		さま
10	ガタンゴトン	4		音	53	ゴーゴー	1	ゴーゴゴゴー	音
11	グルグル	4	グルグルー	さま	54	ゴクゴク	1		音・さま
12	ドン	4	ドーン	音	55	コツツンコ	1	ゴツツンコ	音・さま
13	ピッ	4	ピ	音	56	ゴツン	1		音・さま
14	ピッピッ	4	ピッピ, ピーピッピッ	音	57	ゴトゴト	1		音・さま
					58	コトンコトン	1		音・さま
15	ワンワン	4		音	59	ゴトンゴトン	1		音・さま
16	コンコン	3		音	60	ジャージャー	1		音・さま
17	ポン	3	ポーン, ポンツ	さま	61	シャキン	1		さま
18	アムアム	2		さま	62	シャンシャン	1		音
19	カランカラン	2		音	63	シュツシュツ	1		音・さま
20	カンカン	2		音	64	シュツシュツ	1		音・さま
21	ギョッギョッ	2		さま	65	シュボシュボ	1		音・さま
22	グツグツ	2	グツツグツツ	音・さま	66	ソロソロ	1		さま
23	ゴロン	2	ゴローン	さま	67	チャリンチャリン	1		音
24	シャラシャラ	2	シャラララーン, シャランシャラン	音	68	チョコチョコ	1		さま
					69	チョン	1		音・さま
25	スー	2		音・さま	70	チリン	1		音
26	チン	2		音・さま	71	テクテク	1		さま
27	バーツ	2	バア, バアー	さま	72	トコトコ	1		音・さま
28	パクパク	2	パックパック	さま	73	ドドド	1		音・さま
29	ピーピー	2		音	74	ドンドン	1		さま
30	ヒュー	2		音・さま	75	パツ	1		さま
31	ヒューン	2		音・さま	76	バラバラ	1		さま
32	ブー	2		音	77	ビビビ	1		音
33	フーフー	2		音・さま	78	ピューピュー	1		音・さま
34	プスツ	2		音・さま	79	ピョンピョン	1		さま
35	ポツポツ	2	ポツポ, ポツポー	さま	80	ブラン	1	ブーラン	さま
36	ボンボン	2	ボンポーン	さま	81	ブカブカ	1		さま
37	ウィーン	1		音	82	ペタツ	1	ペター	さま
38	ウジャウジャ	1		さま	83	ペタペタ	1		音・さま
39	カシャカシャ	1		音	84	ポイ	1		さま
40	カチツ	1		音	85	ポイポイ	1		さま
41	ガチャン	1	ガチャーン	音	86	ポコポコ	1		さま
42	ガチャガチャ	1		音	87	モグモグ	1		さま
43	ガツシャン	1	ガツチャーン	音	88	リンリン	1		音

である。表2によると、5分間の遊びのやりとりの中で、76%の学生がオノマトペを1回以上表出しており、約半数の学生が1、2回、約2割の学生が3、4回であり、5回以上表出した学生は6%であった。また、オノマトペを一度も表出しなかった学生は24%であった。

オノマトペの表出数の平均値と標準偏差を算出した結果、順に、1.8、1.7であった。男子学生(26名)と女子学生(74名)で、オノマトペの平均表出数に違いがみられるかを検討するために、男女別に平均表出数を算出してt検定を行った結果、有意な差はみられなかった(表3-1)。また、関わった子どもの性別(男児50名、女児50名)によって、平均表出数に違いがみられるかを検討するためにt検定を行った結果( $t = 2.12, df = 98, p < .037$ )、男児と関わった学生のほうが、オノマトペの表出数が有意に多かった(表3-2)。

表2 オノマトペの表出ごとの人数と%

表出数	0	1	2	3	4	5	6	8	合計
人数	24	27	22	11	10	1	4	1	100
%	24.0	27.0	22.0	11.0	10.0	1.0	4.0	1.0	100.0

表3-1 学生の性別ごとの表出数の平均値と標準偏差値

性別	人数	平均値	標準偏差
男性	26	1.62	1.44
女性	74	1.88	1.76

表3-2 子どもの性別ごとの表出数の平均値と標準偏差値

性別	人数	平均値	標準偏差
男児	50	2.16	1.87
女児	50	1.46	1.40

表4 オノマトペが表出された文脈による分類

文脈	オノマトペを含む発言	オノマトペを含む発言がなされた文脈	事例数	%
①子どもの動作・行動に合わせた表出			62	34.3
	車さん、ブーブー	子どもが玩具の車に乗っているのに合わせて		
	コロコロー、コロコロー	子どもが車輪に棒がついた玩具を動かすのに合わせて		
	トントン、トントン	子どもが玩具の杭をハンマーで打つのに合わせて		
②学生自身の動作・行動に合わせた表出			31	17.1
	動かしていい? コロコロ	学生が玩具の手押し車を動かしながら		
	おいて、トントン	学生が手を包丁に見立てて切る動作をしながら		
	プップー	学生が玩具の電車を動かしながら		
③玩具や物、またはそれらの動きや状態の表現			40	22.1
	はい、ブーブー	学生が子どもに玩具の乗り物を渡しながら		
	コロコロしているなあ	玩具の坂を木のボールが転がっていく様子に対して		
	棒、キラキラしているよ	子どもが持っているラメ入りの細長い棒に対して		
④子どもの動作・行動・注意の喚起			34	18.8
	ここにブーブー作って下さい	分裂した電車の玩具を直すように子どもに促しながら		
	コロコロできるかな?	ボールを転がす玩具で遊ぶことを子どもに提案しながら		
	トントンする?	杭打ちの玩具のそばにいる子どもの注意を引きながら		
⑤子どもが発したオノマトペの反復			14	7.7
	ブーブーか、よっしゃ、行こう	子どもが遠くを見て「ブーブー」と言ったのに対して		
	シュー あ、滑り台	子どもが滑り台に近付いて「シュー」と言ったのに対して		
	ジャー	子どもがビーズを箱に入れ「ジャー」と言ったのに対して		
		合計	181	100.0

### (3) オノマトペの分類：用法による分類と文脈による分類

#### 1. 用法による分類

表1に示した88種類のオノマトペについて、小野(2007)と丹野(2005)による用法の分類を参考に、①音：音を表すもの、②さま：様子を表すもの、③音・さま：音と様子の両方を表すもの、④心情・感覚：こころの状態や主観的な感覚を表すもの、の4種類に分類した。表1における、“用法”に、その結果を示している。4種類それぞれのオノマトペ数とその割合を算出したところ、①音(29個、33.0%)、②さま(32個、36.4%)、③音・さま(27個、30.7%)、④心情(0個、0%)であった。表出されなかった④を除き、①、②、③の割合に差があるかどうかを検討するために $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な差はみられず、3つの用法のオノマトペは同じような割合で表出されていることが明らかになった。

#### 2. 文脈による分類

181事例のオノマトペを、近藤・渡邊(2008)による、オノマトペが表出された文脈による分類を参考にして、表4示された以下の5種類に分類した。すなわち、①子どもの動作・行動に合わせた表出、②学生自身の動作・行動に合わせた表出、③玩具や物、またはそれらの動きや状態の表現、④子どもの動作・行動・注意の喚起、⑤子どもが発したオノマトペの反復、であった。表4に示すように、同一のオノマトペであっても、様々な文脈で表出されており(例えば、“ブーブー”であれば、①、③、④、⑤で表出)、文脈によって分類することの有効性が示された。

表4には、それぞれの文脈に分類された事例数と%も併せて示されている。これらの割合に差があるかどうかを検討するために $\chi^2$ 検定を行った結果、有意差がみられ( $\chi^2 = 33.28, df = 4, p < .000$ )、①の、子どもの動作・行動に合わせた表出が最も多い傾向にあることが明らかになった。また、①や②の動作や行動に合わせた表出や、③の玩具や物の動きや状態を表すといった、本来オノマトペが使われる文脈に加えて、④の子どもの動作や注意を喚起する文脈においても、同じくらいの割合でオノマトペが表出されていることが明らかになった。

### 考察

まず、100名の学生が、一人あたり5分間の子どもとの遊びを介した関わりの中で表出したオノマトペは88種類であった。この88種類に関しては、すべて小野(2007)の日本語オノマトペ辞典の収録語であり、収録語ではないオノマトペ(本研究ではオノマトペから除外した)は“シュワッチ”をはじめとする4種類のみであった。清水・土斐崎・坂本(2014)が指摘しているように、近年、マンガや広告には従来存在しなかった造語としてのオノマトペが多く登場しているばかりではなく、日常的にも“モフモフ”(ネコの毛のようなやわらかさと暖かさを表す)等の、微細な感覚や質感を表現する新しいオノマトペが流布する傾向にある。しかし、本研究においては、そのような造語のオノマトペが表出されることはほとんどなく、“ブーブー”、“コロコロ”など、一般的によく知られたオノマトペが多用される傾向にあった。このことから、低年齢の子どもとのやりとりにおいては、より一般的で具体的状況や動作が明確に表現されているようなオノマトペが表出される傾向にあるといえるだろう。

また、88種類のオノマトペに対して用法による分類を行った結果、心情や主観的な感覚を表すオノマトペは全く表出されておらず、音や様子を表すオノマトペのみがほぼ同じ割合で表出されていたことが明らかになった。この結果は、2名の保育者の表出するオノマトペを長期的に観察した近藤・渡邊(2008)においても、気分や心情を表すオノマトペはほとんど表出されてい

なかったことと一致する。このことは、この種のオノマトペの数が相対的に少ないことにも起因するが、成人が幼児期の子どもと関わるさいには、心情を表現するようなオノマトペは表出しない傾向があることを示しているだろう。しかし、日常会話において必要である日本語初学者のための基本オノマトペ（三上、2006）の70語のうち13語（18%）は、“いらいら”等の、心情を表すものであった。つまり、心情を表すオノマトペは日常会話において基本的な語彙であるにもかかわらず、成人が子どもに対して表出することはほとんどないということである。この点については、心情を表すオノマトペの発達過程も含めて今後検討する必要があるだろう。

次に、一人あたりのオノマトペの表出数については、76%の学生は少なくとも1回以上はオノマトペを表出しており、5回以上表出している者が6%観察された一方、一度も表出しない者も24%観察された。大人が子どもに話しかける時にはオノマトペを多用する傾向にあることは多くの論文で言及されているが（e.g. 福田、1999；近藤・渡邊、2008；宮崎ら、2010）、本研究では、オノマトペを多用する者もいるが、全く表出しない者もいることが確認された。本研究の対象者は、保育者や教職を志望する学生ではあるが、実際の保育経験は乏しく、養育者や保育者の実情を反映しているとはいえないかもしれない。しかし、保育活動に対する子どもの理解を援助する言語ツールとしてのオノマトペの役割を考慮すると、オノマトペを表出しない成人の子どもへの関わり方の特徴や、その関わりが子どもに与える影響等について今後検討する必要があるだろう。

また、オノマトペの表出数において、男子学生と女子学生の間に差はみられなかったが、男児と関わった学生のほうが、女児と関わった学生よりも、多くのオノマトペを表出していたことが明らかになった。このことの解釈としては、女児よりも男児のほうが、身体を動かすような活動的な遊びをすることが多いためであると推察される。次に述べるオノマトペの文脈による分類では、オノマトペを表出した状況として一番多くみられたのが、子どもの動作や行動に合わせた表出であった。したがって、身体を動かす活動的な遊びが多い男児に対してのほうが、オノマトペの表出が多くなったと考えられる。本研究では、関わる子どもの性別によってオノマトペの表出数に違いがみられることが示されたが、子どもの年齢や、保育者の経験年数等で、オノマトペの表出傾向に違いがみられるか等についても検討する必要があるだろう。

最後に、オノマトペが表出された文脈による分類を行った結果について考察する。まず、子どもの動作・行動に合わせた表出が最も多い傾向にあることが明らかになった。保育者は動作に関するオノマトペを多く表出することは従来の研究（近藤・渡邊、2008；原子・奥野、2007）においても指摘されてきたが、それは、主に保育者が自分の動作を分かりやすく臨場感をもって子どもに伝える機能をもつもの（近藤・渡邊、2008）として考察されてきた。しかし、本研究においては、学生自身の動作に合わせた表出も観察されたが、子どもの動作や行動に単に共鳴させる形でオノマトペが表出される事例が最も多く観察された。これまで言及されてこなかったこのタイプのオノマトペが多くみられた理由としては、従来の研究が幼稚園の年少児から年長児を対象としていたのに対して、本研究では1歳から3歳の子どもが対象であったためであろう。言い換えれば、成人は、1歳から3歳の言語獲得期の子どもに対して、“子どもの動作に共鳴させたオノマトペ”を多発しているということがいえる。

このように、成人が、言語獲得期にある子どもに対して特に、子どもの動作に共鳴させたオノマトペを表出する傾向にあることは、養育者等の用いるオノマトペが子どもの語彙獲得を促進するという考え方（Imai, Kita, Nagumo, & Okada, 2008；小椋ら、1997；宮崎ら、2010）とも合致している。この考え方は、オノマトペのもつ具体的音韻表象と事象との結びつきへの気づ

きが、ことばと事象との完全な恣意的結びつきを理解するようになる前段階の気づきとして重要な役割をはたすという考え方である。例えば、“たたく (tataku)” という動詞語は、実際のたたく動作とは音韻的にも視覚的にも何の関連性もなく、“tataku” という音韻と、たたく動作とを結びつけることは非常に難しい。しかし、たたく動作とともに“トントン”というオノマトペが表出された場合、その動作と共鳴した具体的音韻表象であるトントンを結びつけることは容易である。そして、その動作と音韻表象との結びつきへの気づきが、後に、たたく動作と動詞語 (tataku) の恣意的な結びつきの理解へとつながるといのである。このようなことから、意識的にせよ無意識的にせよ、成人が子どもの動作にあわせてオノマトペを表出することは、語彙獲得につながる重要な支援となっていることが推察される。

文脈による分類から明らかになったその他の点は、先行研究と同様に、子どもの動作や注意を喚起する文脈においてもオノマトペが表出されていたことである。何かをすることを促す文脈にオノマトペが埋め込まれていたり、“トントンする？”というように、オノマトペに“する”という語尾をつけて動詞化された表現が用いられる例も多くみられた。この結果は、近藤・渡邊 (2008) においても、保育者が幼児の動きを誘発するさいにオノマトペを用いている事例が観察されていることと一致する。また、子どもとの自然場面における2名の養育者のオノマトペの表出を分析した小椋ら (1997) の研究においても、“じゃーする”、“もぐもぐする”というように、養育者が動詞化されたオノマトペを表出することが観察されている。このことから、成人は子どもと関わるさいに、具体的音韻表象をとまなうオノマトペを用いて動作や注意を喚起する傾向があること、そしてそのことは、子どもに、なんらかの行動が要求されていることを感覚的・直感的に理解させやすくしていることが推察される。

今後の課題としては、まず、幼児期の子どもに対してはほとんど表出されない心情を表すオノマトペが、いつ、どのようにして獲得されていくかを明らかにする必要がある。また、保育者が心情や内的感覚に関するオノマトペを積極的に用いることで、年少の子どもにとっては理解の難しい心的状態の理解や心的語彙の獲得の手助けになる可能性を検討する必要があるだろう。さらに、動詞語の獲得や、行動要求などの相手の意図の理解において、オノマトペがはたす役割を直接的に検討する必要があるだろう。

## 引用文献

- 福田香苗：幼児の発話にみられる擬音語・擬態語、苧阪直行編著 感性のことばを研究する、新曜社、pp.155-174、1999.
- 古市久子：こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本、東邦学誌 (愛知東邦大学紀要)、43、pp.87-104、2014.
- 原子はるみ・奥野正義：保育活動におけるオノマトペ表現の有効的機能に関する一考察、北海道教育大学教育実践総合センター紀要、8、167-174、2007.
- 針生悦子：幼児における擬音語の理解 —濁音文字知識の影響に注目して—、教育心理学研究、58、pp.275-284、2010.
- Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., & Okada, H.: Sound symbolism facilitates early verb learning, *Cognition*, 109, pp.54-65, 2008.
- 葛西健治：オノマトペを手掛かりとした子どもの歌の楽曲分析 こども教育宝仙大学紀要、5、pp.61-71、2014.
- 葛西健治：こどものうたにおけるオノマトペに関する一考察、こども教育宝仙大学紀要、3、pp.33-43、2012.
- 加藤亜由美・深澤佑介・森武俊：五感と関連するオノマトペを用いた意外性の高い飲食店推薦、人工知能学会論文誌、30、SP2-B、2015.

- 小池美和子：5歳児クラスの声と動きの活動に見られた表現の様相—オノマトペの絵本を題材に—、松山東雲女子大学人文科学部紀要、23、pp.15-24、2015.
- 近藤綾・渡邊大輔：保育者が用いるオノマトペの世界、広島大学心理学研究、8、pp.255-261、2008.
- 近藤綾・渡邊大輔：幼児のオノマトペ知識に関する研究、幼年教育研究年報、32、pp.29-36、2010.
- 近藤綾・渡邊大輔・大田紀子・伊藤祥子・小津草太郎・越中康治：保育における自然体験活動でのオノマトペ表現に関する実態調査、幼年教育研究年報、30、pp.113-119、2008.
- 前田安里紗・上間大生・白水菜々重・松下光範：日本語学習者を対象としたオノマトペ学習のためのデジタル絵本システム、人工知能学会論文誌、30、pp.204-215、2015.
- 三上京子：日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化、ICU日本語教育研究（国際基督教大学紀要）、3、pp.49-63、2006.
- 宮崎美智子・岡田浩之・針生悦子・今井むつみ：対成人・対幼児発話におけるオノマトペ表出の違い—母子絵本読み調査における検討から—、電子情報通信学会技術研究報告・TL、思考と言語、110（63）、27-31、2010.
- 中里理子：教科書教材に見るオノマトペ—特徴の整理とそれを踏まえた読解指導との関連を目指して—、上越教育大学研究紀要、25、pp.1-14、2005.
- 小椋たみ子・吉本祥江・坪田みのり：母親の育児語と子どもの言語発達、認知発達、神戸大学発達科学部研究紀要、5、pp.1-14、1997.
- 小野正弘：日本語オノマトペ辞典、小学館、2007.
- 清水祐一郎・土斐崎龍一・坂本真樹：オノマトペごとの微細な印象を推定するシステム、人工知能学会論文誌、29、pp.41-52、2014.
- 田守育啓：商品名および店名・施設名に利用されているオノマトペ、人文論集（兵庫県立大学紀要）、47、pp.49-70、2012.
- 丹野眞智俊：オノマトペ（擬音語・擬態語）を考える—日本語音韻の心理学的研究—、あいり出版、2005.
- 吉川政夫：運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ、バイオメカニズム学会誌、37、pp.215-220、2013.